郷土史への扉
The gateway to local history

成長願う土人形

3月3日はひな祭り。桃の節句ともいわれ、女の子の成長と幸せを祈る年中行事です。ひな人形などを飾って、お祝いした家庭も多いのではないでしょうか。

節句に飾られた土人形

鹿児島では昭和の初めごろまで、女の子が初節句を迎えると、ひな壇の赤い毛せんの上に土人形や紙人形（※1糸びな）、※2金助鞠（きんすけまり）、季節の花々、着物用の布などを飾って、お菓子や煮しめなどのごちそうを作り、親戚・知人などを呼んでにぎやかに祝いました。飾られた土人形は、子どもが生まれた時に親戚などがお祝いとして贈ったものです。

土人形は男びな・女びなだけでなく、神功皇后（じんぐうこうごう）や武者、金太郎といった神話・物語の登場人物、動物など形もさまざま。5月にある端午の節句では、男の子のお祝いとして飾られていました。

全国各地の土人形は、ほとんどが京都の伏見人形の影響を受けているといわれています。伏見は元々焼き物の産地でしたが、戦乱の世が終わり江戸時代になって世の中が安定してくると、伏見稲荷を参拝する人々の土産物として、土人形が作られるようになりました。

江戸時代前半に全国でひな祭りの風習が行われるようになると、伏見人形を手本にして、各地で土人形の制作が始まったようです。型を使い粘土を成型して作る土人形は、型と粘土質の土さえあれば作ることができたので、全国に広がりやすかったと考えられます。

鹿児島の土人形

鹿児島ではいつから土人形が作られ始めたのでしょうか。鹿児島の土人形の代表格である帖佐人形の起源については、島津義弘が朝鮮出兵で連れ帰った陶工が遠く離れた古里をしのび作り始めたという言い伝えがありますが、確実なものではありません。

帖佐人形の最も古い記録として、嘉永6（1853）年の年号が刻まれた土型が残っていることから、遅くとも江戸時代後半には人形制作が始まっていたと推測されています。

その後、垂水人形（垂水市）や東郷人形（薩摩川内市）などの土人形も作られるようになり、明治・大正時代に鹿児島の土人形制作は最盛期を迎えます。帖佐人形の作り手は、最盛期に40軒ほどありましたが、現在では1軒のみが伝統を守り続けています。

霧島市でも、かつて国分向花で向花人形という土人形が作られていました。色合いが落ち着いていて造形が細かいとされる向花人形。国分に住んでいた武家の姉妹が作っていたと伝えられています。しかしながら、現存する人形が少なく、他に作り手がいたかなどの詳細は分かっていません。その姉妹が亡くなったのは姉が安永9（1780）年、妹が寛政2（1790）年。向花人形が制作されたのは鹿児島で土人形制作が盛んになる前であったと考えられるため、ほかの産地に先駆けて制作されていたかもしれません。

時代は変わっても、子どもの健やかな成長や幸せを願う人々の気持ちは、きっと変わらないものなのでしょう。

（文責＝堀之内）

※1 鹿児島に伝わる伝統工芸品。和紙の着物の中に1本の割竹が入っており、その先に麻が付けられたもの。

※2 直径30センチほどの大きなまり。天井から吊り下げられ、ひな人形の隣に飾られた。

土人形「武者」

向花人形「三味線」

金助鞠（きんすけまり）